

2011 年度デジタルプラクティスアワード報告

デジタルプラクティス(DP)の目的は、ICT 実務の現場での実践やそこから生み出される知見を広く社会全体で公開共有し再利用することです。この目的に最もかなう論文を1年に1編選び表彰しています。2011 年度デジタルプラクティスアワードは以下のように決まりましたので報告します。

記

受賞者：川合史朗氏 (Scheme Arts, L.L.C.)

受賞論文：Gauche の開発戦略—小規模プロジェクトこそ国際化を考えよう—
(第2巻2号, pp.80-87)



川合史朗氏

川合史朗氏からの受賞メッセージ：

Scheme Arts の川合です。

この度は私の『Gauche の開発戦略—小規模プロジェクトこそ国際化を考えよう—』を評価して頂き、ありがとうございます。

「世界に飛び出す日本のソフトウェア」特集号への招待論文、というお話をいただいた時に、実は少々迷いました。私が開発している Gauche という言語処理系、確かに英語圏でも使われてはおりますが、誰もが知っている有名なソフトウェアというわけではございませんし、著名なベンチャー企業がこれを使って競争を勝ち抜いた、というような派手な話があるわけでもありません。

もうひとつ迷った理由は、「世界に飛び出す日本の〇〇」という設定が、竹内先生の真意はともかく、「世界」を「日本」の上位と考えるというか、日本→世界というステップを想定しているようにも取れたことです。Gauche は最初から特に、どこからどこへ、というステップを意識していなかったものですから、この特集にふさわしいものになるか、という点が疑問でした。

結局論文では、「ニッチなソフトウェアだからこそ、「日本」というような限定をつけずに世界中からニッチを探す方がお得だよ」という、搦め手のような議論を展開したのですが、これは「日本→世界というステップ」に対する別解の提示でもありました。

「世界」と言うと、こう、グローバルな、大きな問題に取り組むような印象を受けてしまいがちですが、ソフトウェアの多くはローカルな問題を解決するものです。東京であれ、サンフランシスコであれ、ホノルルであれ、パリであれ、バンガロールであれ、そこにはローカルで小さな、でも当事者にとっては大事な、問題があります。世界というのはたくさんさんのローカルの集まりでもあるわけです。その中にはほんとうにその地域に特殊な事情があってそこでしか解決できないものもあるでしょうが、こっちのローカルで解決できる方法が、こっちのローカルでも使えそうだし、っていうこともたくさんあるでしょう。ここのローカルと、海のむこうのローカルと、点と点を結んでゆくようなつながり方もあるかもしれない。

自分の身の回りの問題を解くために始まった小さなプロジェクトにとって、世界進出、なんていうのはとても大げさな野望のように聞こえるかもしれません。けれども自分の身の回りの問題を解決できたそのソフトウェアは、海の向こうの小さな街の誰かの身の回りの問題を解決できるかもしれません。使う言葉が違うくらいで、問題そのものは大して変わらないかもしれません。だから、言葉のハードルを越えるための最低限の足掛かりがあれば、地球の裏側で使ってもらえるのも、隣街で使ってもらえるのも、あまり違いはないのではないかと、小さなプロジェクトを元気づけられることが出来たとすれば、幸いです。

表彰式：ソフトウェアジャパン 2012 会場（タワーホール船堀、2012 年 2 月 1 日）にて、

ご出席いただけなかった川合史朗氏に代わり、丸山宏氏（技術応用運営委員会委員長）が上記受賞メッセージを代読されました。

選考方法：選考委員会であるデジタルプラクティス編集委員会委員は 2011 年 1 月～12 月に発行された DP に掲載された全論文の中からベストプラクティスが十分に記述されていること、論文として内容・構成が優れていることという観点から、特に優秀と認められる論文を選定した。



メッセージを代読する丸山委員長

以上